

社会福祉実践における価値検討の必要性について

阪 倉 恵

〔抄録〕

社会福祉は人間の社会生活にかかわる個人と社会との相互支援の活動であり、また、資本主義社会が生み出す社会問題およびそこから派生するさまざまな生活障害に対応して、人々の基本的人権を守り自己実現を支援するものである。社会福祉実践は、個人の主体性を尊重し、尊厳ある個人としての社会生活をいかに保障するのかということに焦点がおかれた活動であるが、そこには社会福祉がめざす目的および社会と個人の倫理や文化などの価値体系が前提とされている。資本主義的価値観を基礎にしながらも、社会福祉実践はその過程において、個人にどのような価値を実現させていくのであろうか。個人の生活は内的生活とともに社会生活からなるため、個人においても内的価値、社会的価値があり、またソーシャルワークの機能的価値や社会が認める価値もあろう。本論文では、主に価値とは何かを中心に考え、倫理や文化の価値志向性に導かれる実践のあり方を探る手がかりとしたい。

キーワード：社会福祉実践，倫理，文化，value，worth

はじめに

社会福祉は、人間の社会生活にかかわる個人と社会との相互支援の活動であり、また、社会問題の解決にむけた専門的な対人援助の活動である。そのような社会福祉支援は、対象者や援助者にとって、また社会にとって何を意味し、何を実現していくのだろうか。

社会福祉は社会科学の一分野としてあり、医学、心理学、社会学、政治・経済学、法学など隣接諸科学と絡み合いながら支援の体系を発展させて来た。そして、それら隣接諸科学には、それぞれ個人と社会に対するそのものの歴史的な意味、すなわち学としての固有の価値が表現

されている。しかし、近年のわが国の社会福祉学辞典や社会福祉事典には「価値」そのものの項目がない。つまり、個人と社会に対する支援の体系を確立しながらも、社会福祉の価値が明確にされて来なかったということになろう。では、社会福祉の価値を問うことは無意味なのであろうか？あるいは、社会福祉の価値を問うことは不可能なのであろうか？社会福祉における価値を求めるに当たって、本論文では個人を中心にその検討の必要性について考察していきたい。

I 社会福祉における支援の目的と方法について

1 社会福祉の概念に見る価値検討の必要性

近代において獲得された自由のうえに、第二次大戦後、発達したほとんどの現代資本主義国家においては、少なくとも形式的には民主主義が確立し、国家責任と社会権を含む人権思想に裏付けられた社会福祉の展開がみられる。その歴史は、対立的であった自由と平等の概念が「平等な自由」(A.ド・トクヴィル)の発見の後、民主主義の二大原理として確立され、すべての個人の人権擁護と自己実現の基本的要素となった過程として特徴づけられる。

社会福祉は、目的概念と実体概念という二つの概念に分けられ、前者は法律、制度、政策、運動などの目的や社会全体の幸福など漠然とした概念を表し、後者は現実に存在する法律、制度、政策の全体概念を意味する場合に用いられ、さらに広義と狭義に分けられる。広義社会福祉 (social welfare) は、欧米で用いられているように、賃銀を除く一般的生活条件を保障する社会政策の総称であり、狭義社会福祉および社会保障、住宅、公衆衛生、教育、医療、雇用なども社会福祉として含む概念である。広義の立場の定義として、次の例がある。

A.ザロモン (孝橋「新・社会事業概論」 p38)

「社会事業とは文化的な理想に対応する国民生活態様を導入保護することを目標とする国家と社会の努力の総体を指すが、このすべての努力というのは、文化がより遅れているか、または妨げられている社会層の、健康的・道徳的・経済的諸関係を向上させることを目的とした行為である。」

E.デヴァイン (孝橋「新・社会事業概論」 p38)

「社会事業 (social work) とは既存の制度が役立たない場合、個人の生活を保護し、既存の制度を補充し、さらに社会の要求に適應しなくなった諸点を修正する、社会自らの欠陥を補うための社会的努力の総計である」

フリードランダー (Introduction to social welfare 1980)

「社会福祉とは諸法、諸計画、諸給付および諸サービスによって成り立つシステムであり、市民の福祉および社会秩序の機能にとって、欠くことのできない社会的ニーズを満たす諸条件を強化したり、または確固たるものにすることである」

他方の狭義社会福祉は、わが国で用いられているように一般社会政策を補完する概念であり、行政的立場、政策論的立場、技術論的立場から以下の定義がなされている。

a. 行政的立場；現行社会福祉制度の組織体系を示したもの

「社会保障制度に関する勧告」1950年

「社会福祉とは、国家扶助の適用を受けている者、身体障害者、児童その他援護育成を要する者が、自立してその能力を発揮できるよう必要な生活指導、更生補導、その他の援護育成を行うことをいう」

b. 政策的立場；人々の生活困難は資本主義社会が生む社会問題に起因し、社会福祉は社会政策と並んで、社会問題への対応と捉えるもの

孝橋正一（「新・社会事業概論」p43，ミネルヴァ書房 1989）

「社会事業とは、資本主義制度の構造的必然の所産である社会問題に向けられた合目的、補完的な公・私の社会的方策の総称であって、その本質の現象的表現は、労働者＝国民大衆における社会的必要の欠乏（社会的障害）状態に対処する精神的・物質的な救済、保護及び福祉の増進を一定の社会的手段を通じて組織的に行うところに存する」

c. 技術的立場；人々の生活困難を社会的不適応として捉え、社会福祉の本質を人間関係論的視点から支援するための実践的行為の体系である、ソーシャルワーク機能に見いだす。

黒木利克（「日本社会事業現代化論」p25，全社協1958）

「定型的な社会的実践としての社会事業は、その主体における何らかの経済的欠損において、特定の型の技術を採用しつつ、社会病理現象の解消をはかることによって、特定の価値概念に奉仕する行為である」

H. ウイットマー（孝橋「新・社会事業概論」p40）

「社会事業は、あれこれのサービスを受ける途上に横たわっている障害を克服するよう個人を援助することである」「社会事業とは、社会制度的組織の中に個人を効果的に適合させるよう援助する行為である」

これらの中で、政策的立場の定義が資本主義社会の運動法則と社会福祉政策や実践との関連について本質と現象としての関係を明らかにし、社会福祉の本質的な価値の検討の必要性を述べており、また、技術的立場が他の類似する制度や活動から社会福祉を区別する特徴である社会的機能を明らかにし、固有の機能的価値の検討の必要性を述べている。社会福祉の目的・意義、役割・機能といった社会福祉実践の価値の検討にあたって、これらの定義の重層的理解から、社会福祉実践に投影される社会的価値や社会福祉実践における専門職の価値が見えてくるであろう。

2 社会福祉の目的

1) 社会福祉の一般的目的

社会福祉の基本的・一般的目的是、他の社会政策とも共通して資本主義体制維持の必然性という極めて政治的課題から発している。第一次大戦後、資本主義の「全般的危機」の時代に入り、①労働運動の高揚や民族解放闘争など社会主義的影響から資本主義体制を守り、②独占資本を破綻から救い、③社会平和を取り戻すために、「社会福祉学原論」p100～101) 国家権力の政治的・経済的・社会的諸関係への全面的介入が始まる。第二次大戦後、国家独占資本主義の段階に至って行われた社会保障や雇用政策など社会改良的な福祉国家的諸政策の主眼は、現代資本主義体制維持のために「生活問題への現実的な実効性よりも、国民の多くにいざという時には国家が何かをしてくれるという期待を抱かせ」「国家への忠誠と支持」を得ることにあろう。(浜岡政好「現代の貧困と生活不安」) 体制そのものの矛盾を明確にして行く必要があろう。体制矛盾は社会福祉対象者の生活に最も顕著に現れるため、社会福祉実践は体制矛盾の明確化に対して最も貢献すべき社会科学である。

2) 社会福祉の直接的・特殊的目的

一方、直接的・特殊的目的は、日本国憲法第13. 14. 25～28および97条や社会福祉の諸法・制度に表現される社会福祉の理念および基本的人権の保障の具体化にかかわっている。憲法第25条の示す理念的価値は、「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」として、社会福祉がすべての国民に人間としての尊厳にふさわしい生活と基本的人権の擁護および個性的な自己実現を保障し、社会保障及び公衆衛生を補完する役割を担い、その遂行に当たっての国家責任を明確にしたことにある。生活保護法や児童福祉法をはじめ、憲法の生存権・社会権の理念を具体化する社会福祉の諸法の示す目的は、次のように整理することができる。

①「生活の保障、保護、生活の安定・向上、経済活動への参加」などで表されるように、金銭又は現物給付による経済的保障によって、一定の生活水準の維持を図ることが基礎的要件である。そのうえで、②「援護・育成、自立の促進・助長、社会復帰を促進、更生を援助・補導」などで示されるように、対人福祉サービスによって、社会を構成する一員として社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会を促進することが必要となる。そして、①からは公的扶助を中心に、一般社会政策を補充する間接的援助である貨幣的・物質的保障が導かれ、②からは非貨幣的で直接的な面接や相談などの精神的支援が具体的な課題とされ、効果的な方法として制度および援助技術が必要とされる。

社会福祉の直接的・特殊的目的は、社会問題とそこから派生する社会病理現象のなかで障害、疾病、老齢、母子家庭など、各々個別的な属性を伴いながら生きている人々の生活障害や生活破壊から基本的人権を擁護し、人間の尊厳を守り、自己実現を可能とするために、憲法の

理念的価値の具体的現実化の方策を行うことであり、そのための効果的な実践的方法を内包する。日本国憲法は主権在民、恒久平和主義、基本的人権の尊重を基本理念とし、平和の内における生存と幸福追求を社会的平等の権利として認め、そのために民主主義の徹底を要求しているのである。

3 社会福祉の方法

社会福祉の方法とは、社会福祉を達成するための手段あるいは一連の手続きをさし、次のように分類できる。①貨幣的・非貨幣的な社会福祉ニーズの内容による分類、②施設入所や在宅などニーズを充足する場所による分類、③社会保険・公的扶助・社会的サービスなどの政策論的分類、④評価・調整・開発・保護など援助機能による分類、⑤ケースワークなど社会福祉固有の実践的体系（機能別処遇技術）による分類、⑥対象者に焦点をおいた分類等である。⑥には対象者の生活上の問題を解決するための援助をはかる直接的方法と、問題解決のために社会資源の活用によって対象者を取り巻く環境条件を調整する間接的方法があり、間接的方法は社会福祉固有のものである。

これらの方法は、いずれも個人の生活が社会経済活動を基礎に成立し、資本主義社会や国家の仕組みに組み込まれた歴史的、階級的、倫理的な個人として社会関係のなかに位置づけられていることを表している。そのことは社会福祉実践が、どのように生きることが幸福につながるのか、個人と社会との関係や価値観を表し、また、個人と社会の在り方を問うものでなければならないことを表している。

社会福祉実践は、専門職による経験的・理論的な援助技術に依拠しつつ、個人や家族、集団または地域社会と専門職による共同の活動であるが、実践に当たっては社会福祉がめざす究極の目的や個人および社会の道徳・倫理上の目的や価値体系が前提とされ、そのような社会の文化的側面は一般的・特殊的目的にみた経済・政治などの動向に規定される。そのため、社会福祉実践は資本主義的価値観を基礎にもちながらも、主体性を尊重し、基本的人権を擁護し、尊厳ある個人としての社会生活をいかに保障することができるのかということに焦点が置かれた活動であり、それを生活レベルで捉えたQOLの向上・維持を考えるにおいても「価値ある」「価値を生む」ことが前提となる。では、日々の社会生活での価値とは何であろうか。個人は、この共同活動のなかでどのような価値を見いだし、実現していくのであろうか。それは、人権の中身でもある。

Ⅱ 援助関係の意義

1 世俗的な価値

D.ベルは「我々は啓示に夢中になると世俗的なことを忘れがちになる。すなわち、経済的、

および社会的交換の関係とか、仕事や業務の性格とか、過程の本質とか、日常生活を支配する伝統的な行動様式といったものを忘れがちである」(「資本主義の文化的矛盾(上)」講談社学術文庫 p33)という。世俗とは、a. 世の中の風習・風俗、b. 世間、c. 普通の人・俗人をさし(広辞苑 1993年)、日々の暮らしの中に表現され、一般的な社会関係や個人の在り方に関するもので、金銭、権力、能力、評価、学歴、家風、性格、習慣、健康、制度、法律など社会関係のなかで自己の利益を実現するためのものといえる。世俗的価値とは、つまり、人間社会における幸福への手段なのであり、「自由と自由の要件としての種々の価値とを混同してはならない」(H.J.ラスキ「近代国家における自由」岩波文庫 p53)であろう。

ところで、このような世俗的な価値へと人々を突き動かすものに2つの源流がある。1つは勤勉、廉潔、禁欲的な天職としての労働を重んじる「資本主義の精神」であり、2つは「人間とは欲望を無限に追求するものであるというラディカルな個人主義」(ベル P182)、世俗的なホブズ主義である。「社会契約説」が政治社会(国家)の起源と正当性を自由・平等・独立な個々人の自発的相互契約によるとして、政治社会から伝統性・神秘性を剥奪し、人為的構成的性格を明らかにした(現代政治学小辞典有斐閣 p125)後、人々は新しさに価値を見だし、政治的に国家権力の制限はうけても経済・文化には制限はなく、近代主義は「反逆によって成り立つ」(アーピング・ハウ)。何が善であり、普遍的であるのか、評価の基準はない。人間の心理は合理的精神の体系ではなく欲望の衝動から成り、人間は欲望の奴隷である。近代主義は距離感を崩壊させ、自己の絶対性を徹底的に主張し、価値ある感覚が人生の最大の目的となった。科学は飛躍的な発展を遂げ、伝統的な価値や道徳、宗教、理想は忘れられ、あるのは現在と予期し得ぬ未来。この不安感が近代人や現代人の特徴でもある。生活水準の向上や商品と経済的価値観の多様性は、文化的正当性を失い、快楽主義的な欲望を刺激し続ける。

資本主義は社会を己の満足のみを追求する多くのバラバラな個人の集合と捉え、「優越者の肯定あるいは擁護の論理」(嶋田啓一郎『社会福祉思想と理論』ミネルヴァ書房 p12)を前提に、自然淘汰と功利主義的倫理から社会的ダーウィニズムを生み出し、無限を特質とする心理的欲求=価値という資本主義的価値観を確立した。ベルによれば「ブルジョア社会を定義するものは、ニードではなくて欲求(ウォント)である」。現代は、技術-経済構造、政治形態、文化の中で経済と文化の領域が結合して単一の性格構造をなすべき社会が矛盾をきたしている。それは経済領域に必要とされる組織の種類と規範に対し、文化の中心を占める自己実現という規範が分裂を起こしている為であり、資本主義の矛盾は文化の危機から生じている。

憲法13、25条を法的根拠として、社会福祉はすべての個人の尊厳を守り、その自己実現の保障を基本的人権擁護の重要な内容と認め、その実現のために制度的・実践的体系をもっている。そのさい、我々は自己実現が欲求=価値という豊かさを追求する現代社会の特徴として現れて来たことを忘れてはならない。それは個人の変化とともに社会の変化をも要求するものである。また、人間社会が、単に個人の寄せ集めではなく、それゆえ、自由と平等が対立矛盾の

関係ではなく、補完しあうものであることを主張せねばならない。社会福祉が保障すべき価値、社会福祉実践においてワーカーが担うべき価値、また援助関係のなかで個人が実現していく価値の中身とはどのようなものだろうか。まずは、普遍的な哲学倫理の世界に価値の意味を求めてみたい。

2 倫理的価値

1) 事実判断と価値判断

恣意の認識形態は判断であり、事実判断と価値判断がある。事実判断は経験科学のように個々の事実に関するもの、事実の法則的關係の確認や倫理的關係を表現し、真・偽の區別が存在するが、人間の欲求や感情が生み出す価値とは無關係に存在する。価値判断は「その対象と判断する主観との關係を立言するもの」であり、主観の確信や要求と直接結び付いて、善、美、正、有用などの是認ないし否認が示され、対象に対する主観の倫理的態度が表明される。効果的な社会福祉実践とは、客観的な状況判断とともに具体的な要求をもち、決心を経て、確信に満ちた自己決定ができることであり、そのために事実判断と価値判断の可能性を高め得る援助關係の実践が求められる。

2) 価値とは

一般に欲望の対象は、価値（よい）も反価値（悪い）も「人間の願望や欲望を満たすべき条件を備えたものはみな価値である」と見なすことができる。欲望の満足は快感を、欠如は不快感をもたらすため、我々は日常生活の中で常に自己の欲望に即してより好ましいものを求め、より好ましくないものを回避する価値生活を営んでいる。欲望は広義の意志とされる感情や情緒を発動させる根拠となり、道德的善悪の概念に結び付く。

価値判断はすべて主観的であるとか非客観的なのではない。誰もが「よいもの」として認め実現すべきであるとする真、善、美などは、好き嫌いなどの個人の主観的な感情を越えた客観的な意味をもっている。価値は、信念として概念化されることによって目標への手段となり、行動を動機づける。社会福祉実践は、そのような動機づけを重視すべきであり、また、自由、平等、平和なども社会福祉実践の貴重な価値となろう。

3) 実質的価値（シェーラーにしたがって）

価値は「よいもの」「財」のもつ「よさ」つまり、有用性である。よいものは現実の生活の場においてはじめて価値的な意味をもつ「財」となり、我々が直接触れる対象は何らかの価値を担っている。もし、価値を担った対象から価値を取り除き、単に「物としての統一」にのみ着目すれば、無規定なたんなる「物」となるが、逆に「物としての統一」を取り除き「価値性質の統一」に着目して構成すれば「財」となる。社会福祉実践において、援助技術も「財」として存在するが、その有用性は機能として表される。また、「財」は変化し消滅し、「財」に対する評価も個人・時代・社会によって変化する。しかし、「財」に与えられている「価値性質」

は、財の経験的生滅を越えて財の世界から独立し、客観的かつ理念的な対象として、またアプリオリな本質の対象として永遠に存在することを、我々は客観的事実として直感している。

4) 価値の序列

すべての価値は段階的な秩序に従い、形式的連関性を持ち、形式的小および序列の区分がある。価値の性質上の対立区分として形式的には積極的価値と消極的価値があり、美と醜、優と劣、快と不快、正と不正、知と無知等でどのような価値においても認められる。また、価値の序列は価値の高低の段階を意味し、最も重要で基本的なものであり、価値様態の低から高へ感覚的価値、生命価値、心的（文化）価値、人格的価値へとアプリオリな序列を形成する。

- ① 感覚的価値は感官感情に現れる快・不快等であり、最低の価値系列に属するものである。
- ② 第2段階の生命価値は生命自体および生命感情の機能に現れ、健康と病気などに現れる。
- ③ 第3の心的または文化的価値は、真理の探究や芸術の創作など精神活動に伴う美醜、法不法等の価値であり、実現させる手段として価値を担うのは芸術作品や実定法等である。
- ④ 人格的価値は、人間の人格において現れる聖・不聖の絶対価値である。何を「聖」なるものと捉えるかは時代や民族などで異なるが、聖なる価値は最高段階にあり、これに出会い、浄福や絶望の体験を経なければ精神的・文化的価値さえ無価値となる。人格的価値を実現する作用は愛である。

価値序列の中において、より高次な価値ほど持続的、永続的、非分割的であり、他の価値を基礎づけ、最低の価値は一時的で去来しやすく、相対的で、すべて表面的である。

5) 価値認識作用

価値の性質は直感的な「感得」という価値界への通路となる情緒的作用により認識され、心情的に諒解する志向作用である。また、価値序列は複数の価値の高低を認識する「先取・後置」の作用と、一つの価値を高めまたは低めて認識する「愛・憎」による。愛はある対象の与えられた価値からより高い価値へ向かう志向運動であり、低い価値から高い価値へ向かう運動において初めてより高次の価値が開示される。

価値世界は「精神の情緒的なもの」の領域にあり、価値は心情の秩序として把握される。その把握は「理性の眼」によってではなく、特有の明晰さをもった愛・憎の「精神の眼」以外にはないのである。

このような人間のうちに仕組まれた価値の性質を無視した社会福祉実践は、人間の価値を実現する仕事とはなり得ないし、社会的機能を果たすことも困難であろう。では、価値は生活の中でどのように具体化されるのであろうか。（大学通信教育共通教材「倫理学」p351～361）

Ⅲ 社会福祉実践に関する価値

1 社会福祉実践と文化

社会福祉は、人間が人間らしさを求めながらいかに生きていくことができるかを追求する。どのような境遇の人もすべて歴史的、社会的、階級的な繋がりの中で存在し、祖先から命を引き継ぎ、自分の人生を生き人々と交わり、子孫へと引き継いで行く。その過程のなかに自然との融合や対決を通じてさまざまな人間生活に対する理解や生と死を引き受けるための有形無形の知恵が生み出され、生きて行くことの価値を了解して来た。そして、その価値を日々の暮らしのなかに表現し、家族や子孫に引き継がれ、あるものは社会に伝播され習慣として定着し、洗練され、伝統として息づいていく。我々が求める社会福祉実践とは、そのような長い歴史の中で培われて来た文化のうえに構築されるものであり、また、文化を形成するものである。文化は「知識、信仰、芸術、法律、風習、その他社会の成員としての人間によって獲得された、あらゆる能力や習慣を含む複合体の全体」（エドワード・タイラー）あるいは「文化とは、後天的・歴史的に形成された、外面的、および内面的な生活様式の体系であり、集団の全員又は特定のメンバーにより共有されるもの」（C.クラックホーンと W.H.ケリー）と定義される。文化と人間の特性について少し考察してみたい。

2 文化の契機と諸相

文化は、自然に支配されない人間の精神が自然に働きかけて、自然の所産とは異なる所産をもたらし、自然界とは異なる世界を作り上げ、これを自己の本来の活動場面として、自己実現に努めるものである。文化には、次のような契機が存在する。

1) 精神性

文化は人間の創造活動であり、動物に対する人間の無限の優越を表す精神の働きである。この契機から精神の類型化が考えられ理論的、経済的、美的、宗教的、社会的、政治的体験などが成立する。想定される規範意識や存在の把握の精神機能に応じて価値領域は、真理価値（真）、倫理価値（善）、美価値（美）、宗教価値（聖）などがある。

2) 人為性

創造作用の素材は自然であり、自然から独立した主体としての人間のみが自然と闘い、文化を成立させる。文化は、自然に働きかけ、否定し、変化させ、自然に対立するものであり、この契機から3つの諸相が考えられる。

- a. 内面的規範、生活術、精神的安らぎ、関係性などかわりに関する技術的生活文化。
- b. しきたりや因習などを通じて人間相互間を明確に規制するための社会制度である社会的文化。
- c. 自然の人間から理想の人間像への完成に向けて歩む自己実現のための教養的文化。

3) 客体性

文化は人間の活動作用であり、かつ、その成果でもあるが、人間の客観的精神であるといえる。この契機から生哲学の立場が考えられ、絶えず発展し続ける生を「より以上の生」と捉え、この生は個性的形相を産出することから「生より以上」として生に対立するところに文化が認められる。

4) 価値

文化が客体的なものであることから、自然に対立した人間が主体として世界の中心に立ち、すべての事物が人間との関係に置かれ、特殊な遠近法の元に配置され価値が生じる。人間にとって世界は没価値的な自然界ではなく、文化という価値の世界である。この契機から言語、認識、神話、芸術、宗教などがある。

5) 歴史的社会的性

文化という価値の世界の形成に当たって、人間は文化世界における存在としての人間であり、人間は文化を作り人間を造るのがまた文化であるという相互関係が生ずる。このような場面が歴史的社会であり、文化は歴史的社会的なものであるが、人間は歴史的社会においてのみ文化人たり得る。この契機から文化体系が要求され、教育、経済生活、法律、政治的職務、宗教、社会、芸術、哲学、科学などは文化活動の等質的な作用連関となる。

6) 自己実現

文化は人間と動物との本質的な違いを示すと同時に、文化の諸契機にはより高次の自己実現の段階へと向かう志向性が見られる。人間が文化を生む場合、すでに自然人ではないが、精神主体としての文化人ではない。人間は文化を創造することによってはじめて精神主体としての文化人となり得る。文化は自然を媒介とした人間の自己実現の過程であり、教養と結びつくものである。

3 倫理と文化にみる人間の価値志向性

倫理的価値および文化の契機と諸相においてより高次のものへの志向性、人間の価値志向性という共通点が見いだせる。社会福祉実践は、本来これらの価値志向性に導かれて行われるものである。世俗的な価値でみたように、資本主義社会においてはあらゆる手段に訴えて人間の欲望がかき立てられ、価値観の多様化傾向が見られるが、それは社会構造の諸側面のアンバランスな状況において、主に経済的価値観の多様化とかかわって現れているのであって、人間が本質的にもっている文化的な価値の多様化を意味するものではない。快楽主義は一時的にはあり得ても、積極的快楽を永続的に実現することは不可能である。それは、価値は理性ではなく情緒作用として現れるが、客観性を有し、聖なる絶対的価値に向かって秩序づけられているからであり、このことによって人間の人間性に対する信頼が生みだされる。

文化は作用価値としての道徳的力をその本源的な活動力とし、必然的に精神的価値実現の前

提としての道徳性を有している。文化の対立概念である原的自然が悪として把握されることから文化活動の道徳性が積極的に評価され、道徳性が客観的目的を求めて倫理と文化の結び付きはより強くなる。文化は、個々人が共通基礎としてもつ原初的な習俗としての全体意識が内的道徳と外的法に分化する過程に現れる歴史的社會において形成される。歴史的社會との関係における倫理と文化の結び付きは、社會の課題と個人の義務にある。前者は、社會生活の連関の形成すなわち文化体系を創造することであり、後者は、協同してそれを産み出すこととされ、ここに文化の倫理的義務が明確にされる。(新倫理學事典, 弘文堂 s 49)

このような価値志向が人間性の根底にあり、どのような人もそれを実現するように仕組まれている。日常生活の中で具体的に表されている行為として宗教行為があり、伝統的宗教は聖、真、善、美などの観念を通して伝統的文化を規定し、文化の中核は価値であるとされる。

Ⅳ 考 察

1 VALUE と WORTH

ランダムハウス英和大辞典によれば、価値をあらわす言葉は大まかには、物の相対的な価値を示す value と、絶対的・本質的な価値を示す worth に区分される。

value の原義は、「強い、価値がある」という意味で、実用性からみた価値を表す。(GENIUS 英和辞典大修館 1995) 価格に代表されるように、客観的に測定し、数値によって記録表示ができる場合に用いられ、その分野も、経済、社会・倫理、自然科学、芸術・文化など多方面にわたる。また、量的あるいは質的に、他のものとの関係づけられたなかでの、そのものの位置づけが表されており、そのことにおける関係性、客観性を有し、重要性、有用性などからも、関わりをなかでの機能的な評価、選択的行為の結果としての価値がイメージされる。value は、また他動詞としても、人が物を経済的に値踏みをする、あるいは、人が人を尊重するなど、比較のうえに立った評価的な意味を含んでいる。

worth は、「あるものと交換しても等しい価値のある」がその本義であり、精神的、道徳的な価値を表し (GENIUS 英和辞典大修館 1995) その重要性および真の値打ちの意味においては value や importance よりも強く、それ自体のうちに存在する真価を意味する。また worth が価値を表す単語として掲載されているのは、ほかには哲学事典のみである。このことから、人間の内的な価値、人間存在そのものの価値、本質的で絶対的な人間の価値、すなわち人間の尊厳の価値を特に問題としているのが哲学であり、他の心理学、経済学、社会学などの専門分野においては、むしろ人間の外的な価値、人間の社会関係的、機能的側面に関心の焦点がおかれているといえよう。

例えば、

A fundamental value tenet of social work is the inherent worth of every person in virtue of his/her humanity.

(ソーシャルワークの根本的な価値は、すべての人がもっている人間としての固有の価値におかれている)

This basic human worth is unconditional.

(人間としての基本的な価値は、無条件である)

enhancing the client's sense of self-worth and confidence

(クライアントの自己の存在価値と自信を高める)

(例文ゾフィア・ブトゥリム訳, 川田誉音「THE NATURE OF SOCIAL WORK」)

「ソーシャルワーク研究」 Vol.20 No.3 1994 p180～184)

このように worth は、人間存在そのものの絶対的な価値、個人の尊厳にかかわる意味において用いられ、value は、ソーシャルワークのようにもう少し広い相対的、関係的、機能的な概念において用いられている。

value と worth の比較 value : worth

価値内容の違い 相対的 : 絶対的

社会關係的：自己

機能的 ： 存在

現象的：本質的

関係 value \rangle, \supset worth

結論 人間の尊厳的価値，個人の存在そのものの価値 = worth

人間の社会関係における役割, 機能的価値 = value

人間のあり方は、個人的かつ社会的な存在であることから

人間の価値 = worth + value であらわされる。

社会福祉の最高の理念は個人の尊厳にあり、社会福祉の目的はその実現にある。それは、言いかえれば、「人間の価値」を実現することにほかならない。その実現に向けての具体的な行為である社会福祉実践の目的も、また、その専門的・科学的な実践の体系とされるソーシャルワークの目的も、究極的には「人間の価値」を実現することを志向するものである。

注：THE BLACKWELL PHILOSOPHER DICTIONARIES 1995

"A Kant Dictionary" Howard Caygill BLACKWELL Reference p410

around a distinction between absolute and relative value,

worth=absolute value; value=relative value と読み替えられるであろう

2 人間の価値と倫理学

1) 科学と哲学

「価値」を表現する単語として worth を用いるのは哲学事典のみであり、人間の価値の考察や実現には、哲学的要素が不可欠である。社会福祉は経験実証科学に基づく社会科学の一分野でありながら、その対象とするものは、人間の存在のあり方であることから、人間としての共通したニーズをもってはいても、本質的に個別独特な個人としてのあり方に対する対応であり、哲学的倫理的対応をも必要とする。

2) 架橋としての価値概念

社会学事典（弘文堂 S63年）では、価値概念は「社会学，哲学，経済学，政治学，文化人類学，心理学など社会科学，人間諸科学を架橋する鍵概念の一つ」とされ、また、新社会学辞典（1993年）においても「社会諸科学，人間諸科学を架橋する鍵概念の一つ」と述べられている。およそ、すべての学問は人間の歴史の中で人間とのかかわりを前提にして成り立ち発展して来た。社会科学や人間科学も含めてすべての学問・研究は人間にとってのそのものの価値を求める行為として存在している。

3) 架橋としての倫理学

倫理学は道徳哲学として哲学の一分野をなす。道徳哲学は伝統的な諸規則が内面化され、「自力で、批判的・普遍的な言葉で考え、道徳的主体としてのある種の自律性を確立する段階に達するとき」（W.K.フランクナ杖下隆英訳「倫理学」培風館 p 6）生まれる。道徳は個人に先立つ社会制度として存在し、その起源、制裁、機能、規律体系という点でも社会的であることから、倫理学は「関係存在としての社会的、現実的な人間を考察する学問であり、それ故この学問は自ら必然的に社会学へ広がり行く性格を自身のうちに」（山下淳志郎「倫理学」明星大学出版部 S56）もち、「人間学としてもあるが、更にまた社会学としても存在する」（山下前掲書）。社会学と倫理学は共に人間相互の諸関係の在り方やその法則を示す点で共通するが、この法則に対して人間がいかにあるべきかを反省的に問うところに倫理学の主体的な特質がある。いわば倫理学は value と worth との架橋であり、科学と哲学の架橋である。

おわりに

社会福祉実践の基本的な理念は、人間の尊厳にふさわしい処遇の保障であるといわれる。社会福祉支援の究極の目的は基本的人権の擁護と自己実現の保障であり、それは、人間存在そのものの価値を尊重するということである。それゆえ、社会福祉実践は一個の人間としての存在や尊厳そのものの価値 worth と、同時に、社会的役割や機能を果たす社会的な存在としての価値 value とを追求する必要がある。社会福祉実践は、自己実現へと向かう人間の倫理的・文

化的な価値志向性に導かれた実践を尊重することによって、個人の自己実現を可能とし、真に人権擁護の立場から人間的価値の実現を支援する民主主義的な社会福祉実践の追求に貢献できよう。

社会福祉は社会科学の中でもとりわけ価値にかかわる分野である。価値は個人の生活規範や行動の動機として現れ、支援活動の社会的機能として現れ、また、法律・制度や社会的制度として現れる。善しとするものは時代によって、地域によって、立場によって変化するが、「人間が尊重に値するのは、人間が先験的な特徴として潜在的に道徳的な存在であるからであって、……その人が何をするかにかかわらず、ただ、人間であることによっている」(カント)。そして、どのように複雑な社会になろうと、ただ、人間であることの普遍性は揺るがないはずである。

(さかくら めぐみ 社会学研究科社会学・社会福祉専攻博士課程)

(1996年10月16日受理)